

卷頭言

学長 柴田悟一

本年、横浜商科大学は、創立四十五周年を迎えました。そしてここに『紀要』第十巻をその記念号として刊行することができ、関係者のひとりとして嬉しく思っております。

前第九巻の巻頭言に、久保前学長が次のように書かれております。

「本学の『紀要』の発刊は、近年、第六巻が創立二十周年、第七巻が創立二十五周年、第八巻が創立三十五周年というように、開学以後の節目となつた年を記念して発行しており、今回の第九巻も同様の事情で刊行することになった。」と。

そしてこの度、第十巻が、前号から5年後の節目として刊行されたわけであります。

前号が刊行された後、この五年間の日本の社会情勢の変化はめまぐるしく、しかも変化の内容はきわめて多難な問題を多く抱えております。こういった中、大学がおかれた環境状況も厳しく、本学もまた解決を迫られる問題が山積していることも明らかであります。

その一つは、学部・学科・カリキュラム等の見直しにより、本学の教育体制の充実が上げられます。大学の使命が有為な人材を育成し、世に送り出すことにあることから、教育体制の充実は当然のことであり、継続して改革を押し進める必要があります。

今一つは、われわれ大学の教員は、研究者であるということです。大学の教育は研究が前提です。常に研究があつてこそ高い教育の実現が可能です。その意味においても、この『紀要』の刊行は極めて重要な意義があると言えます。このように『紀要』が刊行され世に問うということは、本学が研究者集団であることの証であり、大学の一つの使命を果たしている証左なのであります。

われわれ研究者は、自らの研究を発表する場をいろいろと持つており、それらにおいて

それぞれが常に研究成果を発表しております。そしてこの『紀要』もまた、成果発表の場の一つであります。こういった場を利用しながら、本学の研究者が、お互い切磋琢磨し、本学の研究レベルの向上を目指し、さらに努力することをここに誓い合いたいと思います。